

旭川文学資料友の会

友の会通信 第25号

発行・NPO法人 旭川文学資料友の会
〒070-0044
旭川市常磐公園 旭川市常磐館内
電話 0166-22-3334
印刷・株式会社あいわプリント

令和二年度通常総会について

報告と紹介

会長 十河 宣洋

八月の太陽が眩しい日が続いています。今年は新型コロナウイルス感染症の流行により、総会を书面評決にいたしました。例外中の例外と考え

ています。本年七月末現在で会員一七五名、うち法人会員五五人であり、昨年とほぼ同様の会員数です。

すでに、総会資料で報告



理事会 令和2.5.14

していますが、平成三十一年度の主な事業内容を見てみます。

「旭川文学資料館」

企画展、「八匠衆一展」は五〇七名の観覧者がありました。八匠衆一は旭川出身の作家で、苦しみを抱えて生きる意味を問うた作家です。

「歌誌『かぎろひ』六十五周年記念展」もコロナの自粛期間でしたが、三月末で四七一名の観覧者がありました。旭川を中心に続いている短歌の六十五年の軌跡を追いました。

情報提供事業では、旭川市シニア大学生が資料館の見学に訪れました。また「クイズラリー」「スタンプラリー」にも協賛参加しています。

旭川市文化奨励賞を受賞しました。授賞式は十一月三日旭川市大雪クリスタルホールで行われました。受賞を会員全員でお祝いしました。二月十九日旭川トーヨーホテルに黒蔵真一教育長をはじめ、五十名の会員が集い喜びを分かち合いました。

来館者総数は一六六二名とカウントしています。

「井上靖記念館」

企画展は、「井上靖 蔵書展Ⅰ―美術関連蔵書」「人と文学X―『おろしや国酔夢譚』執筆の頃」「井上靖 短編小説の世界」「教科書に載った井上靖作品」と四企画展を実施しました。特別展示として「全国文学館協議会共同展示『三・一文学館からのメッセージ』井上靖と台風」を行いました。

「青少年エッセーコンクール」は『からだ』のテーマで、全国から中学生八十四編、高校生八十六編の応募がありました。表彰式は十二月十五日井上靖記念館で行いました。

関連事業として、「井上靖講座」四回。文学講演会三回。ロビーコンサート二回。お茶会、夏休みおはなし会、朗読会、大人のためのおはなし会、文学講座他を実施しました。来館者は四六一八名です。

令和二年度の事業計画

「旭川文学資料館」 「小熊秀雄没後八〇周年記念展」を現在開催中。「木野工『旭川今昔ばなし』展」を来年予定しています。

「井上靖記念館」 「井上靖 蔵書展Ⅱ」「井上靖 人と文学XI展」「井上靖の旅展」等の展示を企画しています。他に講座なども予定していますが、事情によっては変更になることもあります。

第九回青少年エッセーコンクールの実施も予定しています。以上簡単ですが、報告と紹介です。

歌誌『かぎろひ』 六十五周年記念展を終えて

西 勝 洋 一

昨年の十二月二十四日から始まった「歌誌『かぎろひ』六十五周年記念展」は予定通り四月二十五日に終えることができました。初めは一結社の記念展としては長過ぎるかなと思ったりしましたが、想像もしなかったコロナ騒動で文学資料館の休館が続いたため、実際には観覧いただく機会が大きく減っていました。それを補う形で、終了後も六月二十五日まで展示物をそのまま残して、期間中に観覧できなかったり、もう一度見たいという方々にご来場いただけたことは嬉しいことでした。文学資料館の方々のご配慮に改めて感謝申し上げます。

会場に備えた来場者名簿だけでも五〇〇人を越えていて、思った以上の方々に見ていただいたことが分かりました。開催期間中に亡くなられた同人のご家族が最終日に来場されて、しみじみと亡き人の歌が書かれた色紙に見入っておられた様子や、創刊同人で既に故人になられた方の娘さんが会場に備えたノートに万感の思いを綴ってくれた文章等も強い印象になって残りました。五十人を越える

方々が聴講された、一月二十五日の記念講演会では、創刊者の中山勝の生涯を旭川、道北の短歌活動との関連において辿った他に、現代短歌の最前線の作品をご紹介して学び合いました。

「かぎろひ展」で使った展示物の内、主なものは寄贈して、文学資料館の資料として使っていただけだと思います。もともと、展示していたものの中で、歌誌『かぎろひ』は資



会場風景

料館に在ったものを使って展示していました。創刊号(昭和二十九年八月号)から今年の一月号まで、全部揃えば四六一冊になるはずでしたが、創刊から十年ほどの間のものに欠けている号があつて、いろいろ心当たりを探しましたが全部を補うことはできませんでした。今後とも皆さんのご協力を得て何とか探し出し、文学資料館では歌誌『かぎろひ』のバックナンバーが全て見ることができるといように努めていきたいと思えます。『かぎろひ』に限らず、資料は雑誌一冊でも、一度散逸してしまうと集め直すことが如何に大変なことか、改めて思った次第です。個人で仕舞い込まずに、文学資料館や図書館のような公共的な場所に置いておくことが、後世のためになるのだとも思いました。

四人の女性たちと中山勝が語り合つて「かぎろひ詩社」を立ち上げ、その機関紙としての歌誌『かぎろひ』を創刊してから六十五年。小集団ながらうまくバトンが受け継がれて活動を続けてきましたが、高齢化の波は当社にも押し寄せ、今後の活動の在り方も問われているところですが、現在、旭川には十の短歌グループがありますが、何処も同じような悩みを抱えているようです。幸いに当地では「旭川歌人クラブ」という超結社の研修、親睦団体がありますので、結社に入っていない愛好家の方々も含めて、短歌活動が継続、発展できればと願っています。

(かぎろひ詩社代表)



旭川文学資料友の会創立20周年・旭川文学資料館開館10周年
旭川市文化奨励賞受賞記念祝賀会

令和2.2.19 於：トーヨーホテル

旭川文学資料館を

振り返って

富田 正一

一九九七年(平成九年)の夏、東 延江さんから「旭川の文学関係の資料が揃えば、旭川の文学の歴史を解明するのに便利だと思わない。尾崎さんと話をしたの…」との電話があった。「ああ そうだね」と言う。「富田さんは賛成だね」で電話は切れた。

秋口になって、「話は進展しているよ」。更に翌年になると菅原市長へ提出する趣意書を作成したから、見て必要になる案件も加えてほしいとのこと。呼びかけ人は、東 延江、尾崎道子、深谷雄大、岡田雅勝、富田正一の五人で、一九九九年五月二十日、市長に提出した。

その後、旭川文学資料館(仮称)準備発起人五十一名で旭川文学資料研究会設立総会を開いた。

一番問題になったのは、文団協役員という方から「市からの助成金が少ない。市は本腰で取り組む姿勢があるのか。発起人がこれだけいるのだから市議会議員を動員して運動をしよう。私が先頭に立つても良い」と発言。

この時は、そうだそうだのヤジが飛んだ。富田は、すかさず「話は理解出来ませんが私

たちは手弁当の行動力で市民の資料館を造りたい。ともかく器がほしいのです」と応えると、「うーん。そう言う覚悟があるのなら良かった。でも市との話し合いを忘れないように頼むよ」の注文付の了解を得た。

二〇〇一年(平成十三年)四月二十二日旭川文学資料研究会(会員一四〇名)・相川正志会長で発足した。

十一月啓明小学校の空き教室を図書整理場所として準備が進められた。

二〇〇六年研究会を友の会に改称。その後現在の常磐館へ移転。

二〇〇九年五月十七日、旭川文学資料館開館。富田が副会長から初代館長となった。

二〇一〇年十一月、特定非営利活動法人・NPO法人として運営することになった。

二〇一五年、富田は健康上の理由で館長を辞任。

二〇一六年(平成二十八年)副館長の東延江が館長に就任、現在に至って活動している。

文学資料館が今日あるのも当時、市教委に在職の表 憲章氏のアドバイス、尾崎道子さんの情報提供、「金子みすゞ世界展」実行委員の皆様等のご支援が大きなエネルギーであったと思う。誠に感謝に堪えない。

指定された字数の関係上、端的で多くに触れられないのが残念であったが、昨年の秋には旭川市文化奨励賞を受賞したことは、本当に喜ばしい。会員、関係者のご尽力に深く敬意を表したい。ともあれ、会員皆様のご健勝と益々のご発展を祈念してこの項を終わります。

小熊秀雄

没後八〇周年記念企画展

(第二十三回旭川文学資料展)

「小熊秀雄と旭川の詩人・

歌人たち」について

令和二年九月十五日〜

令和三年一月三十日

沓澤章俊

二十代の約七年間を旭川で過ごした小熊秀雄おぐまひでおが没してから、今年で八十年になります。また、小熊秀雄の詩友今野大力こんのたけちが没してからは八十五年。さらに、この地が旭川と名付けられてから一三〇年が経ちました。

今回は、時代的な制約がありながらも比較的自由に表現活動が出来た、大正期から昭和初期の旭川で活躍した小熊秀雄を中心とする、当時の文学者達に焦点をあてて展示紹介したいと思います。

この時期の旭川文化界のキーマンとも言える小熊秀雄は、宮沢賢治が樺太へ行く途中旭川に立ち寄った年、関東大震災があつた年、さらには、旭川が「市」となった翌年の年でもある大正十二年(一九二三年)、旭川新聞社

の社会部記者として学校、警察、官公庁等を取材し「黒珊瑚」名で旺盛に取材記事を書きます。また、文才を認められ芸芸欄も担当し、自ら、平岡敏男(筆名樹島逸平)と二人で悪魔詩社を名のり、旭川新聞紙上に小熊愁吉しゅうきちの筆名で詩作品を発表します。そして、この頃今野大力(筆名今野紫藻)と知り合います。

今野大力はすでに生田春月主宰の詩誌「芸芸通報」に詩作品を発表していましたが、旭川新聞の芸芸欄にも盛んに詩、短歌、散文作品が掲載されてゆきます。

小熊は、その今野大力と名寄新芸術協会の北村順次郎との間での紙上論争を仕掛けたり、旭川師範学校(現北海道教育大学旭川校)、旧制旭川中学校(現旭川東高等学校)、旭川商業学校(現旭川商業高等学校)に在学中の十代、二十代の若い詩人達の作品を積極的に掲載し、批評もします。

さらに大正十五年、若山牧水が第七師団参謀長の齋藤溜りゅうと一人娘 齋藤史ふみの家に滞在したのを一つのきっかけとして、短歌の会「旭川歌話会」が発足しますが、小熊は幹事として事務局的仕事をこなし、自らも短歌作品を発表してゆきます。

また、小熊は、文学ばかりではなく、旭川文化協会の発足に関わり、医師、弁護士、商店主、教員、主婦や街の若者たちと共に、手づくりの市民劇に出演。

絵も描き、画家の高橋北修ほくしゅうらと交流し、展

覧会に作品を出品するなど、まさに八面六臂の活躍ぶりでした。

そして、「チルチル童謡・童話会」を起こし、子供らに「小熊のおじさん」と慕われてもいました。

そんな活動的な小熊秀雄と同時代の若き詩人・歌人達の姿、周囲から見た小熊秀雄像、また、その舞台である旭川の情景も合わせて紹介できればと思っています。

会期中の十月十日(土)には記念講演会を予定しています。講師は、旭川歴史市民劇「旭川青春グラフィティ・ザ・ゴールデンエイジ」総合プロデューサー兼脚本担当の那須敦志あすしさんです。今年二月にプレ公演がありましたが、小熊秀雄をはじめとする当時の若い文学者、文化人が登場し、実に興味深く、笑いあり詩情ありのエネルギー溢れる群像劇でした。高橋北修の御子女で歴史市民劇実行委員会顧問の星野由美子さんも登場され感慨深いものがありました。

その魅力溢れる登場人物や当時の旭川について那須さんに解説していただくと思っております。

本公演は来年の三月六日、七日に行われる予定です。無事実現することを願っております。

コロナ禍の中にありますので、臨時閉館や会期を変更する場合がありますが、皆様どうぞ、お誘いあわせのうえ、ご来館くださいますようお願い申し上げます。

有島武郎と『松むし』

—その四—

片山 礼子

これまで、有島安子「松むし」所収の短歌を中心に掲載してきたが、今号は有島武郎自身の詩、短歌・俳句の中で短歌について紹介してみたい。

- (一) 夕日がさやかにほふ海原に白い小さい帆が消えて行く
- (二) 幾年の命を人は遂げんとや思い入りたるよろこびも見傳
- (三) 修禪する人の如くに世にそむき静かに戀の門にのそまむ
- (四) 何を見る汝の眸に驚きの南無や尊き驚きの色
- (五) 瑠璃紺の草野に生ふる雲の花夏日照らせば赤に黄に映ゆ

さて、有島武郎にとって短歌はどのような意味をもっていたのであろうか。これまでのように、日本古来からの伝統をふまえるならば、短歌を詠みあげることが知識人としては当然の素養だったのかもしれない。書簡や日記などを含めると、武郎の短歌創作は相当の数にのぼるし、その時期についても注目に値

する。

もちろん短歌だけではなく、俳句や詩にまで及んでいることも念頭に入れなければならぬ。そうした意味では、単に趣味の域にとどまっているとはいえないのである。

当時の与謝野鉄幹主催の「明星」の影響も否めないが、もともと武郎にはそうした素地も加わっていたと考える。

安子が闘病中に短歌を詠むことを勧めたことから、また、妻・安子を元気づけるために再々の別便絵葉書を病室に送っていることから単なる趣味の域とは言い切れないのである。

武郎が、足助素一宛にて安子の短歌を紹介した後に、武郎みずから詠んだ短歌は次の通りである。

- (六) 髪かりて子供二人がくりくくと春の風吹く中をかけて行く
- (七) 電車道電車が来れば腕の子は雙手をあげて合点々々する
- (八) 水の落ちし河口の砂に十坪ほど雑魚の干してある春浅き朝
- (九) 山青く海原青く空青く青きが中にい出し一つ星
- (十) 村膽の心の奥にいゆきつゝ二人手を取りひざまづくかな

(番号は引用者)

こうしてみると、有島武郎の短歌は、情景など明快に映るのである。なぜか場面がイメージしやすいのである。描写が明解とも言え

る。

特に、妻・安子に宛てた短歌にあつては、病床の妻に対して、我が子の現実とその状況を安子に伝えようとしていることもうかがわれる。つまり、この頃の武郎と病室の安子は短歌を通して対話をしているようにさえ映るのである。



『有島武郎事典』
有島武郎研究会 編



片山礼子さんも執筆者の一人

ボランティアのみなさんのページ

ボランティアの一員として

前田 寿賀子

資料館の

受付ボランティアをして

室林 亮子

旭川文学資料友の会のボランティアには、まだ六〜七回程しか関わっていません、それも資料館の受付のみです。そんな私が、会報に出て良いのかとドキドキしながら、今これを書いています。

本は、小さい頃から好きでよく読んでいました。図書館の静かな空間も好きでよくよく通っています。そんな昨年、「詩と遊ぼう」に参加した時、資料館の存在を初めて知りました。当日受付にいらした方から声をかけられ、私は、恐れ多くもあまり考えもせず、受付ボランティアに登録をしたのでした。一日中、本に囲まれて過ごせるなんて、幸せだなあと、とても単純です。でも、何度か受付を体験し、やっぱり、本はいいなあと感じたことと、道外から来られる方などと話ができることも楽しみの一つになっています。今まで知らなかった世界を体験できることを嬉しく思っています。

初めまして

原田 美也子

友人がこちらでボランティア活動をしているのを知り、以前から興味があり退職を機にお手伝いをさせて頂くようになりました。

こんなにたくさん旭川ゆかりの文学資料が揃っているとは知りませんでした。貴重な資料から現在活躍中の方の作品もあり感動致しました。しかも市民の方から寄贈された備品はどれも歴史があり懐かしいです。まだ始まったばかりの私のページですが、これからの楽しみでもあります。こちらに来てからはゆつくり時間が流れます。ここは過去に戻れて未来を考えられて現在を見つめられる、おとなの夢の隠れ家みたいです。

旭川文学資料研究会発足から資料館開館までご尽力ご苦労され、たいへんな事だったと思います。

そして遅ればせながら旭川市文化奨励賞受賞おめでとうございます。

旭川市民になって三十数年。この間、文学には全く興味もなく生きてきた私が今こうして旭川文学資料館のボランティアの一員として週に一・二回資料館に通っています。更にこのような原稿を書くことになり自分が一番驚いています。

既にボランティアを始めていたMさんに声をかけてもらい、時間にゆとりが出てきた時から始めるようになり九月で二年になろうとしています。

スタートは何もかもわからず言われたことをするのがやっとでした。館内も慣れるまで迷子？状態。でもこの間、先輩の方々の親切な指導、昼食時のお話などで少しずつ資料館のことが見えてきました。更に今年二月、創立二十周年・開館十周年・旭川市文化奨励賞受賞祝賀会に出席させていただき創立当時からいろいろなお話を聞くことができ大変勉強になりました。ボランティア同志の集まりが少ないのが少し残念です。

今は少し慣れ、企画展の準備・当番の仕事、本や資料の整理、会報の仕事などを行っています。平成から令和になり予期せぬコロナ禍もあって資料館の役割はどうなっていくのかわかりませんが来館者に来て良かった!!と思ってもらえるよう過去の資料を大切にしながらボランティアの一員として出来ることをしていきたいと思っています。

交流室での活動グループ紹介

「旭川五行歌の会」 活動報告

事務局 三品純一

「五行歌」は、五・七・五・七・七を定型とする短歌に対し、定型にとられない「自由詩」です。「五行歌」の創始者、草壁焔太は、石川啄木が字数や定型に拘らず、三行や五行に書き分けたり、技巧より心情を重視する沢山の和歌を残したことに着目しました。そして、日々の思いを自分の言葉で表現するため口語体を用いて、五行で書き分ける「五行歌」を生み出しました。



旭川五行歌の会は、草壁による「全国五行歌の会」の支部として、二十五年前に始まりました。高齢化に伴い会員数は減少気味ですが、毎月第一土曜日に歌会を開催していま

す。歌会では、各作品を詠み合い、採点により、一席・二席などを決めたり、感想や作者の意図などを述べ合ったりします。が、「一人ひとりの人生が皆違い、思いも違う。作品はその人の人格そのものである」との考えに立ち、添削したり、作り直したりはしません。歌会は作品を通して感じた事、その時々思いを共有する場であり、会員相互の楽しい交流の場でもあります。作品は『グラフ旭川』にも掲載していますので是非、ご覧ください。また、見学希望は事務局までご連絡ください。

「歌集を読む会」のこと

旭川歌人クラブ会員 飯田ひさ子

七名ほどの有志で「歌集を読む会」が発足して、今年で三十四年目を迎えました。

長い歳月の間に取り上げられた歌集を全てご紹介できないのは残念ですが、私が記録を付けさせていただくようになった二〇〇五(平成十七)年から数えて十一歌集にもなりません。

この数年間に、体調をくずされて退会された方や、ご病気などで亡くなられた方もおられます。また、名寄から札幌へ転居された後も通って来られる方もおられ、現在の会員は十四名ほどです。昨年までは毎月行っていました。諸事情や遠方からの会員も増えたことも考えて、今年から隔月の奇数月に変更となりました。第二土曜日の一時半から二時間、旭川文学資料館の交流室をお借りして行っています。会費は一年間一五〇〇円。主に例会のお知らせの葉書代や印刷費に使わせていただいております。

今は、昨年四月から読み始めた現代短歌文庫の『新選小池光歌集』を学んでいます。こちらの歌集もそろそろ終盤に近づいています。次の歌集を決めるにあたり、西勝洋一會長が印象に残った歌集や資料などを持って来て下さり、会員の皆様のご意見やご希望などを話合せて決めています。

昭和、平成、令和と引き継がれてきた「歌集を読む会」で歌集を通して歌人の短歌観や作歌のよりのポイントなどを学べるのも魅力の一つと思っています。



資料館だより

受贈資料(敬称略)

(二〇二〇・二〜二〇二〇・八)

- ・百井 昌男 学校関係記念誌、市立旭川病院、丸井今井、旭川信用金庫ほかの記念誌
- ・山田 亮太 山田亮太『叙事詩鷹栖』(鷹栖町図書室発行)
- ・前田 和恵 「野性と知性」第一〜四号 詩誌「フラジャイル」八号、九号、柴田望詩集『顔』
- ・柴田 望 伊勢茜詩集『黄昏時』
- ・伊勢 茜 旭川、道内関係詩誌多数
- ・森内 伝 旭川、道内関係歌集他多数
- ・西勝 洋一 中村洋一編『中村洋吉短歌集』
- ・中村 洋一 柴田三吉詩集『桃源』、花崎皋平詩集『生と死を見晴るかす橋の上で』、斎藤紘二詩集『東京ラプソディー』、橋本喜夫句集『潜伏期』、季刊雑誌「流域」最終号、詩誌「指名手配」創刊号(佐相憲一編集発行)
- ・若宮 明彦 若宮明彦詩論集『波打ち際の詩想を歩く』
- ・阿部 信行 美術関係図録(旭川関係あり)
- ・瀬戸 正昭 今本衣女句集『いのち』



詩集『顔』



叙事詩鷹栖

その他、各地文学館、記念館館報、各地市民文芸、文芸同人誌、歌誌、俳誌、詩誌等たくさんの寄贈を受けました。心よりお礼申し上げます。

- ・旭川青年大学 講師サイン本、色紙他多数
- ・岡田 勝美 「旭川のふだん記」第七二号
- ・後藤 隆明 世界文学全集(筑摩書房)他
- ・芝山 一雄 「学友会雑誌」(旧制旭川中学発行)、「北人」(旭川東高等学校校発行)
- ・石川 節子 旭川、道内の俳句関係色紙、短冊多数
- ・富田 正一 詩誌「青芽反射鏡」、詩誌「くれっしえんど」一〇九、一一〇号(高橋絹代編集発行)

友の会人事動向(敬称略)

【新入会員】

旭川ケーブルテレビ(株)、工藤有祐、柴田望、田住正弘、清水優、松井晶彦、土田礼子、大地コンサルタント(株)、森田太美子、佐々木公恵、高橋唯之、室林亮子、原田美也子、佐藤穂、神楽神経科内科医院、(株)柴滝建築設計事務所、並木美知子、(株)タカラ工業所

【現在会員数】(七月末日現在)

一七五名(うち法人五件)

編集後記

立秋を過ぎて尚暑い日々が続きました。が、飛び交うトンボ、鳴き集う虫たちの声に秋の気配も感じる頃になりました。前年度の終わりはコロナ禍により総会も開けず会員の皆さまにはご不便をおかけしました。

三月に入ってから五月までの間には緊急事態宣言の発出による休館が三度にわたり、企画展が続けられない等、皆さまには十分ご観覧いただけなかった日々が続きました。

今後まだまだ油断できない状況ではありますが、何とか収束に向かい、安心して来館いただけるような日常が来てほしいと願っております。この通信が発行される頃には二十三回目の企画展が無事開催されていますように。(ま)